

# 日本人の英語学習時間について

－これまでの学習時間とこれから求められる学習時間－

坂田 浩・福田 スティーブ

SAKATA, Hiroshi・Fukuda, Steve

徳島大学国際センター・文教大学教育学部

要旨：「英語学習には時間がかかる」という点においては、多くの識者が同じような見解を持っていると思われるが、では、実際にどの程度の時間が必要なのか、という点に関しては、色々と意見が異なるようである。そこで、本稿では、Foreign Service Institute (FSI) がアメリカ人外交官向けに提供している外国語トレーニングプログラムでの標準授業時間数、ならびに「ヨーロッパ言語共通参照枠」(CEFR: Common European Framework of Reference for Languages) が公表している標準受講時間数を基に、日本人英語学習者が実用的な英語力を身に付けるために必要とされる学習時間について、①英語のみの環境で長期間集中的にトレーニングを受ける場合、②日本の大学を卒業後、国内の教育機関で英語学習を継続する場合、③日本の大学を卒業後、国内で自主的に英語学習を継続する場合、という3つの場合を想定し、それぞれの場合における学習時間数の推定を行った。

キーワード：学習時間、FSI、CEFR、日本人英語学習者、自律学習

## 1. はじめに

「日本人が実用的な英語力を身に着けるには、非常に長い時間の学習が必要だ」ということは、多くの識者がこれまで指摘してきたことであり、この点に関しては我々の多くが「まさしくその通り」と納得するところだろう。ただ、「では、どのくらいの学習時間が必要なのか」という具体的な問いについては、識者によって意見が分かれているようであり、必ずしも十分に一致した見解が得られているわけではないようである。

そこで、本稿では、英語学習時間を議論する際に良く引き合いに出される二つの資料、つまりアメリカ国務省 Foreign Service Institute (FSI) が外交官向けに提供している外国語トレーニングプログラムが提示している標準授業時間数、ならびに Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) が公表している標準受講時間数を参考に、日本人英語学習者が実用的な英語力を獲得する際に求められる学習時間について検討を行った。

実用的な英語力を身に着けるために必要な学習時間は、カリキュラムを構築する際の基本となるものであり、英語教育を実務的な観点から考えていく上で非常に重要な意味を持つ。同時に、個人の学習者にとっては、「これからどのくらいの学習を積み上げる必要があるのか」、「そのために具体的に何をしたらいいのか」を考えるための基礎的な資料となるものであり、非常に重要であると言える。

以降、実用的な英語力を身に着けるために必要な学習時間について論を進めていくが、その前に本稿における前提をいくつか提示することとする。

まず、本稿は実際の学習者を対象に行ったアンケート調査結果を報告するものではなく、現在入手可能な英語教育に関する資料を基に、今後必要と思われる英語学習時間を「推定する」ことを目的としていることに注意して頂きたい。これは、筆者が知る限り、英語学習時間と英語力の関係について、小・中・高校、大学、それに社会人までも対象とした実証調査はこれまで行われておらず、今後日本人に求められる英語学習時間について考えるには、これまでに発表された資料に基づき間接的な推定を行うぐらいしか方法がないと判断したからである。無論、個人レベルの創意工夫により学習効率は変動するものであり、本稿の推定よりもはるかに高い効率で英語学習を行っているケースも多数あると思われるが、そのようなケースは本稿における想定の対象とはなっていないことに注意して頂きたい。

次に、本稿において「学習時間」は、

- ・ 各種教育機関が英語授業として提供する「授業時間」
- ・ 上記授業で提示される課題や宿題を授業以外の時間で行う「課題学習時間」

・ 授業以外に学習者が自主的に英語学習を行う「自主学習時間」

という3つの異なる学習を含むものとし(愛知教育大学外国語教育講座, 2014)、課題学習時間と自主学習時間を合わせたものを「授業外学習時間」とすることにする。なお、「各種教育機関」は、小学校、中学校、高等学校、大学を含む「学校」以外にも、塾・予備校、英会話学校などの教育施設で学ぶものを想定しており、最近注目を集めているオンライン英会話や通信教育などは含めていない点についても付記しておくこととする。

以降、これらの前提を基に、実用的な英語力を身に着けるために必要な学習時間について議論を進めていくが、まず、大学卒業時における英語学習時間(積算値)と英語レベルについ

て概観し、その後、

1. 英語のみの環境で長期間集中的にトレーニングを受ける場合
2. 日本の大学を卒業後、国内の各種教育機関で英語学習を継続する場合
3. 日本の大学を卒業後、国内で自主的に英語学習を継続する場合

という3つの場合における学習時間数の推定を行うことにする。

2. 大学卒業までの学習時間と英語レベル  
2.1 大学卒業までの学習時間について

まず、日本におけるごく一般的な家庭環境の下で、学校での英語授業を中心に英語学習を行

表1: 日本の教育機関における英語授業時間数

学校種別	授業時数	時間換算	
小学校 *1	24	18	*1 Benesse 教育研究開発センター(2008)を参照 *2 ベネッセ教育総合研究所(2015)を基に筆者が算出。中学1年から高校3年の各学年における週間平均通塾回数と平均受講時間数を基に年間(2013年度)の総受講時間数を算出。文部科学省(2008)を基に、その3分の1を英語受講受講数として計算。 *3 大学に関しては、教養課程で提供される英語授業時間を1コマ90分×週2回×15週×2学期×2年で計算
中学校 *1	320	266.7	
高校 *1	434	361.7	
塾・予備校 *2	---	225.7	
大学 *3	8単位	180	
小学校~大学 計		1052.1時間	

表2: 中・高・大学生の授業外英語学習時間数

学校種別	授業外学習時間 (1,161時間)
中学校 *1 高校 *1	休日・平日平均×6年間 35分×365日×6年間=1,277.5-225.7=1,051.8時間
大学 *2	・ 授業に関連する英語学習 32分/週×4週/月×8カ月間×2年=34.1時間 ・ 授業以外の英語学習 23分/週×48週×4年間=75.1時間

中学校、高校、大学共に、日本での学習のみを想定している。

\*1 根岸(2016)を基に筆者が算出。中高生の休日・平日の英語学習時間をそれぞれ算出し、その結果(1日平均35分)を6年間で計算。この数値には、授業の予習復習、塾などでの学習、その他の自主学習を含んでいるので、授業外学習時間合計(1,277.5時間)から上記の塾での英語授業時間数を差し引いた。

\*2 愛知教育大学外国語教育講座(2014)を基に筆者が算出。授業に関連する英語学習時間(予習・復習など)については、週あたりの学習時間(平均32分)×1カ月の週数(4週間)×1年間の授業月数(8カ月)×教養教育2年間で計算。授業以外の英語学習については、1年次の授業外英語学習時間(週平均、約23分)を4年間継続しているものとして算出。

ったと考えてみた場合、授業内外での英語学習時間は概ね表 1、2 のようになるものと考えられる。

まず、表 1 を見てみると、小・中・高ならびに大学で英語授業として提供される時間数は、それぞれ小学校で 18 時間、中学校で 266.7 時間、高校で 361.7 時間、大学で 180 時間となっており、これらに学習塾・予備校が提供している時間数（225.7 時間）を合わせると、合計 1052.1 時間の英語授業を提供していることが分かる。

一方、中学、高校、大学における授業外学習時間を見てみると（表 2）、中・高では、自宅での課題学習時間、その他の自主学習時間を合わせて、合計 1,051.8 時間の英語学習を行っているのに対し、大学ではこの学習時間が激減し、授業に関連した課題学習時間が 34.1 時間、授業以外の自主学習時間が 4 年間の合計で約 75.1 時間となっていることが分かる。これらの時間数を合計すると、授業外学習時間数は 1,161 時間ということになり、先ほど示した教育機関で提供される授業時間数（1,052.1 時間）とほぼ同じ時間を授業外での英語学習に充てていることが分かる。

最終的にこれらの時間数を合計してみると、日本の教育課程を大学まで修了した場合、授業、課題学習、自主学習などを通じて、2,213.1 時間（約 2,200 時間）の英語学習を行っており、そのうちの半分（約 1,100 時間）を授業で、残りの半分（約 1,100 時間）を授業外で学習していることが分かる。もちろん、留学などのケースを想定していないので、約 2,200 時間という結果が必ずしもすべてのケースを網羅しているわけではないが、日本の小学校で英語学習を初めて体験し、中学・高校を卒業後、日本のごく普通の大学を卒業・就職した場合における英語学習時間としてはかなり妥当な数字ではないだろうか。

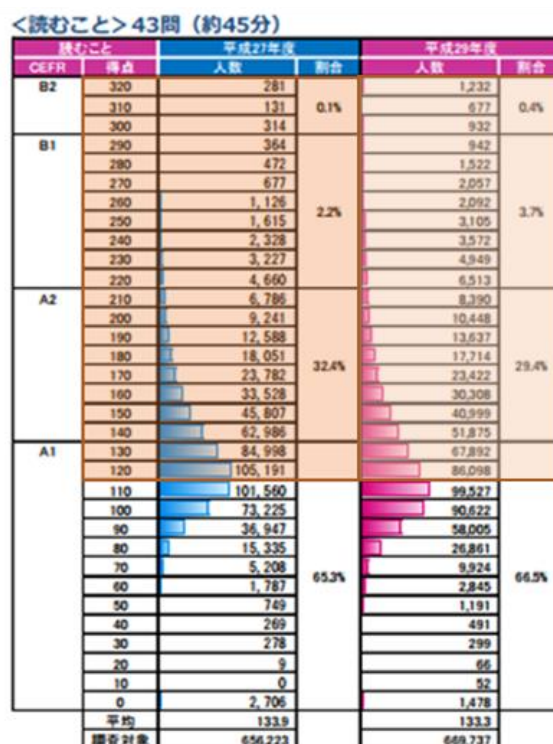
以降、日本人大学生の英語レベルを概観し、その後、社会人になってから必要とされる英語学習時間について検討することとする。

## 2.2 大学卒業時の英語レベルについて

まず、日本人大学生の入学時における英語力を見るために、文部科学省が報告している「平成 29 年度 英語力調査結果（高校 3 年生）の概要」（文部科学省、2018）を基に日本人大学生の入学時における英語力を検討してみたいと思う。

同調査は、文部科学省が実施する全国無作為抽出で行う 4 技能型試験の調査で、現行学習指導要領で学んだ生徒の調査を実施している点、

図 1：平成 29 年度英語力調査結果



そして CEFR の A1 から B2 までのレベルで細かく英語力を測定できるように工夫されている点で高く評価されているが、まず、その資料（図 1）を見てみると、平成 27 年度、29 年度の両年度において、「聞くこと」「読むこと」の平均値が A1 レベルのやや高いところに位置していることが分かる。図 1 でハイライトされている部分は、大学進学率と同じ上位 60%に相当するも

ので、この範囲（つまり、A1の後半より上）に分布する学習者が4年制大学に進学しているものと考えることができる。図1でハイライトされている部分の分布を調べてみると、「聞くこと」「読むこと」双方においてA1とA2以上がほぼ50%ずつとなっており、大学生入学時の英語力は平均してA1とA2のボーダーライン上、TOEICで約225点（英語4技能資格・検定試験懇談会，2018）にあるものと推測することができる。

ただ、この推測は様々なレベルの大学を含めたものとなっているので、一般的に「中堅大学」と呼ばれる大学のTOEIC平均得点はこれよりも若干高くなると思われる。事実、某地方国立大学で1年生を対象に行ったTOEIC IPテストでは、すべての学部を対象とした平均が450点前後であったと報告されており、TOEICの公式データで示されている大学1年生の平均(427点)とかなり近い数値となっていることが分かる（国際ビジネスコミュニケーション協会，2016）。このことから、日本の中堅大学で学ぶ学生の入学時における英語力は、TOEICで言うところの440点前後、CEFR A2レベルの上からおよそ3分の1程度のところに位置するものと考えられるであろう（Tannenbaum & Wylie, 2008）（注1）。

次に、入学後の英語学習について見てみることにする。まず、表1および表2で示した日本人大学生の英語学習時間（授業時間、課題学習時間、自主学習時間を含む）を見ると、授業関連が214.1時間（授業時間＝180時間、課題学習時間＝34.1時間）、授業以外の自主学習時間が75.1時間となっており、大学4年間の合計で約300時間を英語学習に費やしている計算になる。Saegusa (1985) およびTrew (2007) は、入学時の日本人大学生のようにTOEICの得点が450点ぐらいの場合、225時間の学習により得点が100点ほど上がると報告しているが、これはあくまでも企業などが提供する英語研修を基に想定している（三枝，2000）のものであり、集中度やモチベーションなどの点で大学の英語授業とはかなり異なるものと考えられる。大学の英語授業における集中度やモチベーションは企業の研修と比較するとかなり低いと考えられ、たとえ日本人大学生が180時間の授業を受講していたとしても、事実上の効果はさほど高くはないと考えた方が妥当であろう。

事実、先ほど示した某地方国立大学で2年生を対象に行ったTOEIC IPテストでは、すべての学部を対象とした平均値が440点前後となっており、TOEICの点数で見ると限りあまり変化が

見られなかったと報告している。ちなみに、TOEIC公式データでもほぼ同じ結果（1年次の平均は427点で2年次の平均は438点）となっており（国際ビジネスコミュニケーション協会，2016）、中堅大学においては180時間の英語授業を受講した後も英語力にあまり変化はないものと考えられる。

2年間の教養課程の終了後、専門課程で多少の英語の授業はあるかもしれないが、基本的には学生個人の自主的な学習のみになる場合が多く、結局のところ、多少の伸びは見られるかもしれないが、英語力に関しては入学時からさほど大きな進展は見られず、全体的にはTOEIC 440点前後で4年間の大学生活を終えるケースが大半を占めるものと考えられる（注2）。

ここまで、日本人大学生が大学卒業時までに英語学習に費やす時間（授業および授業外学習を含む）および現状における英語力について検討を行った。以降、①英語環境で長期間集中的にトレーニングを受ける場合、②日本の大学を卒業後、国内の教育機関で英語学習を継続する場合、③日本の大学を卒業後、国内で自主的に英語学習を継続する場合、における学習時間数の推定を行うことにする。

### 3. 学習時間の推定

#### 3.1 英語環境で長期間集中的にトレーニングを受ける場合

まず、英語環境で長期間集中的にトレーニングを受ける場合の学習時間数について、FSIが提供するプログラムを基に考えることにする。

##### 3.1.1 FSIについて

FSIが提供する60以上の外国語プログラムは、アメリカ人にとって学習しやすい順にカテゴリーI～IVの4つに分けられており（表3）、その中でも日本語は最も学習が難しいカテゴリーIVに分類されている。カテゴリーIVに分類されている外国語は、日本語の他にも、中国語、韓国語、アラビア語があり、それぞれ標準で2,200時間の授業（計88週間）が割り当てられている（Foreign Service Institute, n.d.）。

この2,200時間という授業時間は、月曜から金曜まで、毎日5時間の授業をすべて外国語でほぼ2年間（各年11カ月）受講するのと同じことであり、非常に長期的で密度の高いものであると理解できる。無論、これらの授業以外にも課題や宿題などをこなす時間も必要であり、仮にその時間を3時間とすると、3時間×5日間×88週間＝1,320時間がプラスされ、最終的には、ここで学ぶ学習者は3,520時間（約3,500

表 3:FSI における 4 つのカテゴリー

<p><b>Category I Languages:</b> 24-30 weeks (600-750 class hours)</p> <p>"World languages" - Languages more similar to English.</p> <p>(24 weeks) <i>Danish, Dutch, Italian, Norwegian, Portuguese, Romanian, Spanish, Swedish</i></p> <p>(30 weeks) <i>French</i></p>
<p><b>Category II Languages:</b> Approximately 36 weeks (900 class hours)</p> <p><i>German, Haitian Creole, Indonesian, Malay, Swahili</i></p>
<p><b>Category III Languages:</b> Approximately 44 weeks (1100 class hours)</p> <p>"Hard languages" - Languages with significant linguistic and/or cultural differences from English. This list is not exhaustive.</p> <p><i>Albanian, Amharic, Armenian, Azerbaijani, Bengali, Bulgarian, Burmese, Czech, Dari, Estonian, Farsi, Finnish, Georgian, Greek, Hausa, Hebrew, Hindi, Hungarian, Icelandic, Kazakh, Khmer, Kurdish, Kyrgyz, Lao, Latvian, Lithuanian, Macedonian, Mongolian, Nepali, Polish, Russian, Serbo-Croatian, Sinhala, Slovak, Slovenian, Somali, Tagalog, Tajiki, Tamil, Telugu, Thai, Tibetan, Turkish, Turkmen, Ukrainian, Urdu, Uzbek, Vietnamese</i></p>
<p><b>Category IV Languages:</b> 88 weeks (2200 class hours)</p> <p>"Super-hard languages" - Languages which are exceptionally difficult for native English speakers.</p> <p><i>Arabic, Chinese - Cantonese, Chinese - Mandarin, Japanese, Korean</i></p>

時間) という非常に長い時間を日本語学習に費やしていることになる。

ここで、FSI の外国語トレーニングプログラムが設定している到達目標を見てみると、外国語プログラムとしては相当高い目標を設定していることが分かる。FSI を含むアメリカ政府関係機関においては、ILR (Interagency Language Roundtable Scale) という外国語能力尺度が共通に定められており、そこでは、

- **Level 1:**  
**Elementary proficiency**
- **Level 2:**  
**Limited Working proficiency**
- **Level 3:**  
**Professional Working proficiency**
- **Level 4:**  
**Full Professional proficiency**
- **Level 5:**  
**Native or Bilingual proficiency**

という 5 つのレベルで職員の外国語レベルを評価するようになっているが、先に示した 88 週間 (約 2 年間) の日本語プログラムでは、終了時に「Professional Working proficiency (業務遂行に十分)」とされる Level 3 の言語能力を獲得することをプログラムの到達目標としている (注 3)。この Level 3 は 5 段階の真ん中に位置することから「中級レベル」と誤解されてしまう可能性もあるが、実は CEFR の C1 レベル (Proficient User 熟達した言語使用者)、日本人にとってなじみの深い英検で言うところの英検 1 級に相当するものであり、外国語学習者にとってはかなり難しいレベルをプログラムの到達目標として設定していることが分かる。

ここまで、FSI の外国語トレーニングプログラムについてその内容を概説してきたが、このプログラムは日本人の英語学習にどのような意味を持っているのだろうか。この点について次に考えてみることにする。

### 3.1.2 FSI の学習時間が意味するもの

FSI が将来のアメリカ人外交官を対象とした機関であることは先にも述べたとおりである。ここで、FSI が想定している学習者について同機関が示しているガイドラインをよく見てみると、同プログラムが提示する標準授業時間数

(表3参照)は、対象となる外国語を学習した経験が全くない英語母語話者 (a native speaker of English with no prior knowledge of the language to be learned) を想定したものであり、基本的に既習者はその想定の対象となっていない (Foreign Service Institute, n. d.)。日本語プログラムを例に考えてみると、時間数を設定する際に想定しているのは「これまでに全く日本語を勉強したことのないアメリカ人」であると考えられ、例えば「高校などでひらがなやカタカナを学んだアメリカ人日本語学習者」などはその想定の対象とはなっていない。また、FSI 外国語プログラムにおける到達目標が ILR Level 3 (=CEFR C1 レベル)、つまり、日本語検定試験 N1 に相当することをあわせて考えてみると、最終的に FSI のプログラムは、全く日本語を勉強したことのないアメリカ人が日本語検定 N1 レベルの日本語力を獲得するために考案された「ガッツリ集中、長期日本語プログラム」に相当するものとして理解することができる。

これを日本人英語学習者に当てはめて考えてみると、FSI の外国語トレーニングプログラムは、「英語力ゼロの日本人英語学習者に英検1級を取得させることを目的とする、非常に密度の濃い英語オンリーのガッツリ集中プログラム」と同じようなものであり、そこで示される標準的な学習時間数は、日本人英語未学習者を対象とした非常に集中的な英語プログラムを構築する際に必要とされる時間数とほぼ同義であると考えることができる。つまり、FSI が示す標準的な学習時間数は、アルファベットも書けない日本人が英検1級 (CEFR C1 レベル) に相当する英語力を獲得するために必要とされる学習量の目安となるものであり、毎日約8時間 (5時間の授業+課題学習を3時間) の学習を月曜から金曜まで約2年間 (合計約3,500時間)、英語のみの環境で集中的に積み上げることにより C1 レベルの英語力を身に付けることができるということの意味していると考えることができる。(注4)

ここまで、FSI の外国語プログラムを基に、日本人英語未学習者を対象とした英語集中プログラムで、C1 (上級、英検1級) レベルの英語力を身に着ける際に必要となる学習時間数について述べてきた。ただ、この学習時間数は、実際に日本で英語学習に取り組んでいる日本人大学生や社会人を取り巻く現状とかけ離れたものとなっており、特に、

- ・いくらできないと言っても日本人英語学習者の英語力はゼロではない
- ・一般の大学や社会人が毎日8時間も英語学習のために使うことは事実上できないと思われる

といった点で、あまりにも非現実的な推定であると考えられる。無論、アルファベットも知らない日本人が2年間ほど英語学習のために欧米圏に留学するというのであれば話は別だが、そういうケースは非常に稀であり、一般論として想定するには適切ではない。(注5)

では、普通に日本の大学を出て、日本の企業に就職をしたと仮定した場合、国際的なビジネスなどで必要とされる CEFR B2、C1 レベルの英語力 (=英検準1級、1級) を獲得するには、大学卒業後、どの程度国内で英語学習を積み重ねていけるのだろうか。以降、CEFR を基に必要とされる学習時間の目安を基に検討してみることにする。

### 3.2 日本の大学を卒業後、国内で英語学習を継続する場合

ここでは、大学卒業後、国内で英語学習を継続する場合に求められる学習時間について CEFR を基に検討するが、まずは、その前提となる CEFR について簡単にまとめてみることにする。

#### 3.2.1 CEFR について

##### CEFR とは?

CEFR は、複数言語間で外国語学習者の習得状況を示す際に用いられる共通のガイドラインで、もとは1989年から1996年にかけて欧州評議会が手がけた「ヨーロッパ市民のための言語学習」プロジェクトにおいて考案されたものである。2001年の一般公開後、瞬く間に世界中の教育機関に広まり、日本でも文部科学省が率先して CEFR ベースのカリキュラム導入を推進しており、最近では書店や語学系テレビ番組でも「CEFR」という名称を目にすることも多くなってきた。

書店に並ぶ英語関係の書籍を見ると、多くが CEFR を「TOEIC や英検などの英語テストに共通するスケール (尺度)」として取り扱っているケースが多いようだが、本来 CEFR は、複数の言語による意思疎通を少しでも可能にし、相互理解を促進することを目指す「複言語主義」 (Plurilingualism) ・「複文化主義」 (Pluriculturalism) を実践する枠組みとして開発されたものであった。

今日、CEFR がこれほどまでに大きな影響力を

持つに至った理由の一つは、「学んだ言語を使って何をどの程度できるのか」というパフォーマンスに基づく評価を採用したことにある。従来の言語テストでは、例えば「ドイツ語特有の表現や文法項目をどの程度理解しているか」を基に学習の評価を行っていたわけだが、このアチーブメントに基づく評価は「ドイツ語特有のルールをこれだけ理解できていれば、この程度のことのできるだろう」という推定に基づくものなので、表現や基本的な文法システムが根本から異なるイタリア語やスウェーデン語に応用することはできない。これはつまり、「英語に特化して作られている TOEIC が、韓国語能力の評価には使えないのと同じ」ようなものなので、先に示した複言語主義・複文化主義を実現する枠組みとしては不十分である。

その一方、「学習している言語を使って何ができるのか」というパフォーマンスに基づく評価は、世界中のどの言語にも共通するものであり、例えば「相手の名前や年齢、住んでいる家族の情報、地元の地理などの生活に密着した内容について、よく使われる表現が理解できる」という基準は、初級レベルの学習者を判断する基準としていかなる言語に対しても適用可能である。たとえそれが英語であっても、日本語であっても、また他の言語であっても、会話をしている相手の名前や年齢などの基本的な個人情報を理解することは、会話における基本中の基本であり、それができなければ、初級レベルと判断されるのは当然である。そして、このパフォーマンスに基づく評価を採用したことにより、CEFR は様々な言語や語学テストに共通する枠組みとして機能することが可能となったわけである。

このパフォーマンスをベースとした評価だが、当然のことながらその評価の基準が必要であり、例えば、先の例のような「相手の名前や年齢、家族の情報などの内容を表すためによく使われる表現が理解できる」といったものがその基準に相当する。そして、その「言葉を使ってどのようことができるのか」という記述をレベル別にまとめたものが、最近、語学関連の書籍やホームページなどでもよく取り上げられている「Can Do リスト」(Can Do Statements)と呼ばれているものである。

CEFR は下のレベルから順に、

- ・ 初級レベル : A1 (初学者)、A2 (初級者)
- ・ 中級レベル : B1 (中級)、B2 (中・上級)
- ・ 上級レベル : C1 (上級)、C2 (最上級)

という 6 つのレベルで構成されており、レベル毎に異なる Can Do リストが提示されている。本稿でも、British Council (2016)、Cambridge University Press (2013)、英語 4 技能資格・検定試験懇談会 (2018) を基に筆者が作成した Can Do リストを表 4 に提示しているので、参考にさせて頂きたい。

ちなみに、表 4 では各レベルに相当する英検の級と TOEIC スコア、それに各レベルに到達するまでの標準受講時間数を併せて記載している。この標準受講時間数は「大体これぐらいの指導を受ければ、そのレベルに達することができる」という目安に相当するもので、例えば英検準 1 級に相当する B2 レベルに到達するには、約 500~600 時間の指導を受けることが最低限必要になる、と理解することができるわけである。以降、この標準受講時間を参照しながら、必要となる学習時間について検討してみることとする。

#### CEFR の適用可能性と限界

ここで、日本人の平均的な英語学習時間 (表 1) と見比べてみて、おそらく「おやっ…」と思われた方も多いのではないだろうか。表 4 を見る限り、日本人の多くは大学卒業までに CEFR の C1 レベル (英検 1 級) や C2 レベルに相当するだけの授業を十分に受けているのである。それにも関わらず、日本人のほとんどが国際的なビジネスで十分対応できるだけの英語力に到達しておらず、英検 1 級の合格率に至ってはわずか 10%程度にとどまっている (古畑, 2013)、これは一体どういうことなのであろうか。

まずここで少し立ち止まって、表 4 に示す CEFR の標準受講時間数と表 3 に示す FSI 外国語トレーニングプログラムでカテゴリー別に割り当てられている標準授業時間数を見比べてみると、FSI プログラムの Category 1 に割り当てられている授業時間数 (600-750 時間) と、表 4 における C1 の標準受講時間数がほぼ同じことに気づくと思うが、これは決して偶然の一致というわけではないように思われる。

先にも示したように、FSI のプログラムは CEFR の C1 を仕上がりレベルとして想定しているわけだが、そのレベルに到達するまでの標準授業時間数が表 1 に示す FSI Category 1 とほぼ同じであるということは、表 4 に示す CEFR 標準受講時間数は、FSI の Category I と同じく、オランダ語、イタリア語、スペイン語、ノルウェー語などの英語と非常に近い言語を想定したものであると考えられ、日本語や中国語、韓国語などの英語とは大きくかけ離れた言語

表 4：CEFR のレベルと標準受講時間数

CEFR レベル	レベル別 Can Do Statement	標準受講時間
<b>C2 最上級</b>	聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。	1,000～1,200 時間以上
<b>C1 上級</b> ・英検 1 級 ・TOEIC945 点～	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりとした構成の、詳細な文章を作ることができる。	700～800 時間以上
<b>B2 中・上級</b> ・英検準 1 級 ・TOEIC785 点～	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者とはお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。	500～600 時間以上
<b>B1 中級</b> ・英検 2 級 ・TOEIC550 点～	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起こりそうな、たいいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。	350～400 時間以上
<b>A2 初級者</b> ・英検準 2 級 ・TOEIC225 点～	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。	180～200 時間以上
<b>A1 初学者</b> ・英検 3 級 ・TOEIC120 点～	具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。	90～100 時間以上

British Council (2016), Cambridge University Press (2013),  
資格・検定試験懇談会 (2018) を基に筆者が作成

は想定していないということを意味している可能性が高い。

元々、CEFR がヨーロッパ圏内での相互理解を促進するために作られた枠組みであることを考えれば、日本語のようにヨーロッパとは縁もゆかりもないような言語がその対象となっていないのは至極当然のことであり、そこで示される標準受講時間数が日本人英語学習者に当てはまるとは考えにくい。

事実、外国語には相対的に学びやすいものと学びにくいものがあり、日本語と英語のように言語体系が全く異なる言語を学ぶ際には予想以上に時間がかかるのと考えるのは当然である(井上, 2000)。例えば、留学生が日本語を勉強する場合、言語的・地理的に近い韓国や台湾からの学生は比較的短期間で日本語のテレビやラジオを理解し、日常会話もスムーズにこなすことができるようになるが、欧米圏からの学生の場合は長期間学習しても日本語でのやり取りに苦勞する場合も多く、結局、十分なレベ

ルの日本語を身に付けることなく母国に帰ってしまうケースも散見される。

日本人にとっての英語もこの欧米圏からの留学生にとっての日本語と同じようなものであり、英語と近いヨーロッパ言語を母語とする学習者と比較すれば、日本人英語学習者が同じレベルに達するまでに数倍の時間が必要になることは実感として至極納得できるであろう。ということは、日本人の場合は CEFR が想定しているより以上の受講時間・学習時間が必要であり、結果、「1,000 時間以上の授業を受けてきているのに、ほとんどの日本人が CEFR が示すレベルに達していない」という事態が生じているものと考えられるのである。

CEFR に掲載されている標準受講時間数を基に「日本人には〇〇〇時間の英語学習が必要」とインターネット上で主張しているところがいくつかあるようだが、これはあまりに安直に CEFR の情報を取り込んだ結果であり、日本人英語学習者にその情報を適用するには不適切で



ある。そこで、ここでの議論を基に、CEFR における標準受講時間数を基にした換算表を提示し、国内の教育機関で学習を継続する場合の学習時間について検討してみたいと思う。

### 3.2.2 国内の教育機関で学習を継続する場合

大学卒業後、英会話学校などで英語を学んでいる方も多いようだが、その効果は学校ごとに様々であり、一概に推定することは難しい。そこで、ここでは「大学卒業後に通う各種教育機関が現行の学校教育とその効果において同じである」という前提の下、学習時間の推定を行うことにする。

まず、表 1 で示したように、日本の教育機関

は大学卒業時まで合計で約 1,100 時間の英語授業を提供しているわけだが、その効果は CEFR で想定されているものよりもはるかに低いものとなっており、CEFR における A2 レベル (TOEIC 440 点前後) にとどまっている。これを表 4 の CEFR における標準受講時間数に当てはめると、約 300 時間に相当することから、現在日本の教育機関が提供している英語授業は、CEFR が対象として想定しているヨーロッパ圏学習者よりも 3.7 倍ほど長くかかることが分かる。

これは、日本語とインド・ヨーロッパ言語間に見られる基本的な違いとそれに起因する学びにくさ、基本的な教授法の違い、学習環境 (例えば、クラスサイズや日本語 100% の言語環境

表 5 : CEFR 受講時間数を基にした換算表

CEFR Level 受講時間 *1		FSI 換算 受講時間 *2	国内授業換算 受講時間 *3	国内で提供している 英語授業時間数	
C2 --- ---	1,000-1,200 時間以上	3,000-3,600 時間以上	3,700-4,440 時間以上		
C1 英検 1 TOEIC 945~	700-800 時間以上	2,100-2,400 時間以上 (中央値 2,250 時間)	2,590-2,960 時間以上 (中央値 2,775 時間)		
B2 英検準 1 TOEIC 785~	500-600 時間以上	1,500-1,800 時間以上 (中央値 1,650 時間)	1,850-2,220 時間以上 (中央値 2,035 時間)		
B1 英検 2 TOEIC 550~	350-400 時間以上	1,050-1,200 時間以上	1,295-1,480 時間以上		
A2 英検準 2 TOEIC 225~	300 時間 時間以上	900 時間 時間以上	1,100 時間 時間以上	B2 までの 受講時間 *4	C1 までの 受講時間 *4
A1 英検 3 TOEIC 120~	90-100 時間以上	270-300 時間以上	333-370 時間以上	小・中・高校、大学の 英語授業時間数 (塾・予備校を含む)	

- \*1 大学卒業時の TOEIC 得点 (440 点前後) に対応する CEFR 標準受講時間数 (300 時間) を算出。
- \*2 FSI の標準受講時間数 (2,200 時間) に合わせるため CEFR C1 の標準受講時間と英語授業時間数 (300 時間) を 3 倍することで作成。ちなみに、卒業後に FSI 方式 (海外語学研修など) で学習した場合の学習時間は以下のとおり。
  - ・ B2 まで: 1,200 時間 = 授業 750 時間 + 授業外学習 450 時間 (750 時間 ÷ 5 時間授業/日 × 授業外学習 3 時間/日)
  - ・ C1 まで: 2,160 時間 = 授業 1,350 時間 + 授業外学習 810 時間 (1,350 時間 ÷ 5 時間授業/日 × 3 時間授業外学習/日)
 授業時間の算出については、以下の\*4 に示す方法を参照した。
- \*3 CEFR 上での英語事業時間数 (300 時間) を実際の時間数 (1,100 時間) に合わせるため、CEFR の受講時間数を 3.7 倍し、各レベルの受講時間数を算出した。
- \*4 各レベルに表示されている標準受講時間の中央値から英語授業時間の換算値 (900 時間、1,100 時間) を差し引くことで算出した。B2、C1 までの推定受講時間は以下の通り。総学習時間については、上記\*2、表 6、7 を参照。
  - ・ B2 までの受講時間は、FSI 換算で約 750 時間、国内の授業換算で約 935 時間
  - ・ C1 までの受講時間は、FSI 換算で約 1,350 時間、国内の授業換算で約 1,675 時間

など)の違いなどが複合的に影響した結果であると考えられ、どれか1つにその原因を求めることは非常に難しい。いずれにしてもこの結果を見る限り、「標準的な日本人が英語を学習する時、CEFR に示される標準受講時間数の約3.7倍を必要とする」と推定することが可能であり、この結果に基づき表4の標準受講時間数に変更を加えてみたものが表5である。

表5を見ると、ビジネス場面などで最低限必要とされるB2レベル(英検準1級、TOEIC 785点)に到達するには、CEFRにおける500~600時間の3.7倍に相当する約1,850~2,220時間(中央値2,035時間)の指導を受けることが必要であり、さらにその上のC1レベルに到達するためには、CEFRにおける700~800時間の3.7倍に相当する約2,590~2,960時間(中央値2,775時間)の指導を受けることが標準的に求められることが分かる。ただ、大学を卒業した社会人の場合、約1,100時間の英語学習をすでに受講していると考えられるので、実際に英語学習を継続する場合は、B2レベルに到達するには、求められる2,035時間から1,100時間を差し引いた約935時間の指導が、C1レベルに到達するには、求められる2,775時間から1,100時間を差し引いた約1,675時間の指導が必要になるものと推定することができるだろう。

ここまで、授業時間数を基に必要とされる学習時間について考えてきたが、ここで忘れてはいけないのは授業外学習の時間の存在である。先に示したように、日本人は約1,100時間の英語授業を学校教育で受講する一方、時間的に見てほぼ同じぐらいの学習を授業外に実践している。英語学習を全体として考える際には、授業だけでなく授業外学習も非常に重要であり、特に授業外学習は学習の定着や満足度の向上などに大きく作用する(Doumen, Broeckmans, & Masui, 2014)ことを考えれば、授業外の学習も学習時間の一部として考えていくことはとても意味があることである。

そこで、先ほどの結果を授業外学習時間と併せて、もう少し分かりやすくまとめてみたものが以下の表6である。なお、表6においては、表1、表2の結果に基づき、大学卒業後も各種語学校などで提供される授業時間と同じだけ授業外においても学習を行うことを想定している。

英語学習の場合、大学卒業後も何かしらの教育機関で学習を継続するとなると、例えば「英会話学校に通う」「英語が学べるビジネススクールに通う」などを思い浮かべるだろうが、経

表6：卒業後、各種教育機関で学習する場合

		CEFR B2	CEFR C1
大学卒業前	授業時間	1,100	
	授業外学習時間	1,100	
	小計	2,200	
大学卒業後	授業時間	935	1,675
	授業外学習時間	935	1,675
	小計	1,870	3,350
合計		4,070	5,550

単位：時間  
数字はすべて概算

済的・時間的余裕を考えるとなかなか難しい場合も多いと考えられる。そこで次に、もっと経済的にやさしく、かつ時間的にも自由度が高いオプション、つまり「自主学習で英語を勉強した場合の学習時間」について考えてみることにする。

### 3.2.3 国内で自主的に学習を継続する場合

大学卒業後、完全に自力で英語学習を行ったとした場合、一体何時間ぐらいの学習が必要となるのだろうか。この疑問に対するヒントを見つけるために、まず、「一回の授業は、自主学習で置き換えたらどのぐらいの時間になるのだろうか」というところから考えていくことにする。

#### 授業内外の学習とカーネギー・ユニット

これまでに行われた、教師の指導に基づく学習と学習者による自律学習を比較した研究を見てみると、「自律学習は教師の指導による学習と同じぐらいの効果がある」(Soper, 2017; Ulrich & Pray, 1965)というものもあれば、「いやいや、学習者の自律学習にそれほどの大きな効果は確認できなかった」(Schroeter & Higgins, 2015)というものもあり、またその一方で「自律学習は教師主導の学習よりも長期的には効果が高いことが確認された」(Brydges, Carnahan, Rose, & Dubrowski, 2010; Serrat et al., 2014)というものもあり、その結果は様々である。ただ、どの研究も学習者が主導する学習の必要性ならびに重要性は認めており、「短期的には教師主導の学習の方が効果的だが、長期的視点から見た学習の定着度は自律学

習の方が高い」(Pedersen et al., 2018) と総括することはできると思われる。

この2つの異なる学習が有する短期的・長期的な視点から見たメリットを総合的に活かすために、大学などの高等教育機関においては双方の学習を組み合わせた「単位制」(Credit System) を前提にカリキュラムが構成されている。単位制は、1900年代初頭にアメリカで高等教育の「量」を保証するために考案された「カーネギー・ユニット」(Carnegie Unit) に基づいており、その基本となる「単位」については、「授業内の学習を1時間、授業外での学習を2時間行い、それを15週間継続する(学習時間の合計=45時間) ことで、1単位を付与する」と定められている。アメリカの大学をはじめ多くの高等教育機関では、このカーネギー・ユニットに基づき「週1時間、1学期15週間の単位をフルタイムで毎学期15単位習得することによって4年で学位が取れる」(青木, 2017, p. 38) システムが採用されている。

ここで、注目したいのが「1単位の計算方法」である。「単位」(Credit) は、いわゆる「学習の区切り」に相当するものであろうが、教師主導の授業と学習者による授業外学習のバランスという視点からその計算方法を見てみると、「ある一区切りの内容を学修するには、授業だけでなく、そこで学んだ内容(もしくはこれから学ぶ内容)を学習者自らしっかりと学ぶことも重要であり、そのために学習者は授業のおよそ2倍の時間を目安として自ら学習を行う必要がある」という意味がその裏に含まれていることに気づく。日本の大学でもこれと同じシステムが採用されており、大学教育の根幹となる大学設置基準を見てみると、一回1時間(90分)の授業に対し2時間(90分×2)の授業外学習を行い、これを15週(つまり、計45時間の学修)行うことで1単位が与えられるように規定されている。この「授業1時間につき授業外学習2時間」という目安は、アメリカの多くの大学で A rule of thumbs for academic success (学術面で成功するための経験則) として認められているもので、他の国際的な単位認定制度(例えば、UCTS: UMAP Credit Transfer Scheme アジア太平洋大学交流機構(UMAP)が認定する単位認定制度)も同様の方法で学修の認定を行っている。このことから、「授業1時間につき授業外学習2時間」という目安は、日本やアメリカだけでなく、国際的なレベルで幅広く認められているものとして考えることができるであろう。(注6)

#### **授業時間と自主学習時間の目安**

時折、ここで示した「授業1時間につき授業外学習2時間」という目安を基に、「自主学習は教師の指導に基づく学習と比較して約2倍時間がかかる」という主張を目にすることがあるが、これについてはもう少し検討する必要があると思われる。

確かに、授業以外にも学習者自らが学習することは非常に重要であり、そのために予習と復習の時間を授業の2倍程度と想定することは、学習を量的観点から保証するための目安として理解できる。ただし、この目安は授業と授業外学習の組み合わせを前提としたものである。完全に自主学習のみで同様の内容を学習しようとするれば、何かしらの形で授業での学習や授業外の課題学習を量的・質的観点から埋め合わせる必要がでてくるものと考えられる。

まず、量的観点から考えてみることにする。例えば、ある項目について学ぶために、授業1時間、予習・復習を含む課題学習2時間、合計3時間の学習が必要であると仮定してみよう。同じ内容を学習者の自主学習のみで学習しようとする、当然のことながら、上記3時間の学習を自主学習のみで代用する必要が出てくるわけだが、仮に2時間の課題学習がほぼ同じ時間の自主学習で代用できると考えてみても、何らかの形で1時間の授業学習分を自主学習でまかなう必要が生じてくる。その結果、自主学習の時間は2時間以上となり、授業時間(1時間)の2倍を超えることになる。

しかしながら、実際には自主学習と課題学習で学習効果が同じと位置付けること自体が難しく、課題学習よりも自主学習の方がより長い時間を要するものと考えの方が普通であろう。課題学習では、内容やテーマ、それに解法に関するヒントなどが授業中に提示され、なお且つほぼすべての項目を得手不得手関係なく半強制的に学習させられることから、自主学習よりもよりも効率的で、内容的にも偏りが少ない学習が期待できる。一方、自主学習は学習者自らがテーマ・内容を決定し、教材を準備し、学習を進めていく(溝上, 2009; 畑野 & 溝上, 2013) ものであることから、内容的にも偏りが生じやすく、分からない箇所があれば学習者自らが調べながら対応する必要があることから、課題学習と比較するとかなりの時間が必要になると考えられる。

また、自己コントロールという観点から考えてみても、英語の自主学習には相当な時間が必要であり、課題学習よりもより長い時間が必要になるものと考えられる。これまでも教師主導の講義とオンライン教材を用いた学生の自

自律学習を比較した研究は多数発表されており、オンライン自律学習は講義と同等（もしくはそれ以上）の効果を表していると報告している研究（例えば、Jamero, Borghol, & Mihm (2009) や Pedersen et al. (2018) など）も多い。ただ、それらの研究で使用されている学習教材および学習内容は、対照実験のためにあらかじめ研究者により事前に準備されたものであり、学習者自らが考え、選択し、準備したものではない。事実、Jackson, Zhong, Phillips, & Koroluk (2018) の研究を見る限り、ほぼ完全に学習者の自主性に任せて学習させた場合、学習者の多くが最終試験のほぼ前日までオンラインでのテスト勉強を先延ばししたと報告しており、自主学習における自己コントロールがいかに難しいかを如実に表している。

卒業後の自主的な英語学習は、まさしく先延ばしとの闘いである。そして、その闘いに勝つためには、唯一の武器である自己コントロールをどの程度上手く活用できるのかが重要な役割を果たしてくる（マクゴニガル, 2013）。カーネギー・ユニットにおける授業外学習が教師からの指導およびコントロールを前提としたものであることを考えれば、そこでの学習は、大学卒業後に直面する「内容や教材、それに時間配分や学習のペースに至るまで、すべて自分で計画・実行しないとイケない」といった高いレベルの自律性および自己コントロールを必要とする学習とは全く異なるものである。したがって、カーネギー・ユニットを基に「自主学習は教師の指導に基づく学習と比較して約2倍時間がかかる」と単純に主張するのはあまり適切ではなく、むしろ、同様の主張に関しては、卒業後の自主的な英語学習に必要な学習時間の下限を示すものとして考える方がより妥当であろう。

これらの推論を基に大学卒業後の自主英語学習時間数を試算してみたものを表7に示す。表7では、大学卒業までの英語学習を総計約2,200時間と想定しており、そこからCEFR B2レベル（英検準1級）までに必要な学習時間を最低2,805時間として、そしてC1レベル（英検1級）までに必要な学習時間数を最低5,025時間として計算している。

CEFR B2までに必要な2,805時間という学習時間については、表6に示す卒業後に通う英会話学校・塾などの教育機関が提供する授業時間数935時間をカーネギー・ユニットに基づき2倍した1,870時間（表7「自主学習時間1」）に、

表7：卒業後、自主的に学習する場合

		CEFR B2	CEFR C1
大学卒業前	授業時間	1,100	
	授業外学習時間	1,100	
	小計	2,200	
大学卒業後	自主学習時間1	1,870	3,350
	自主学習時間2	935	1,675
	小計	2,805	5,025
合計		5,005	7,225

単位：時間  
数字はすべて概算

もともとの授業外学習時間である935時間（表7「自主学習時間2」）を加えることで算出している。また、CEFR C1レベルまでの時間数に関しては、表6に示す卒業後に教育機関で受講する授業時間数1,675時間を2倍した3,350時間（表7「自主学習時間1」）に、もともとの授業外学習時間である1,675時間（表7「自主学習時間2」）を加えることで算出している。

#### 4. まとめ

本稿では、FSI 外国語トレーニングプログラムおよびCEFRを含む様々な資料を参照しながら、今後日本人に求められる英語学習時間について推定を行った。まずは、最終的に日本人に求められる英語学習時間についてまとめたものを、図2に表すこととする。

FSIのプログラムは言い換えれば「英語力ゼロの日本人英語学習者に英検準1級もしくは1級を取得させることを目的とする、非常に密度の濃い英語オンリーのガッツリ集中プログラム」のようなものであり、そこでCEFR B2レベル（英検準1級）に到達するには、卒業後、約1,200時間の学習（750時間の授業+450時間の授業外学習）が、CEFR C1レベル（英検1級）に到達するには、約2,160時間の学習（1,350時間の授業+810時間の授業外学習）が標準的に必要になると推定される。

一方、CEFRが示す標準受講時間を基に考えてみると、



必要になるが、その一方で、

- ・ 大学卒業後、自主的に英語学習を継続するのであれば、CEFR B2 レベル (英検準 1 級) までには約 2,805 時間の学習が、CEFR C1 レベル (英検 1 級) までには約合計 5,025 時間以上の学習が必要になる

と推定することが出来るであろう。

ここまで、日本人英語学習者が実用的な英語力を身に付けるために必要と思われる学習時間について、様々な資料を基に推定してみたわけだが、調査・推定の方法に関する妥当性、得られた結果の信憑性に関する検証を行っていないことから、実測値との隔たりがかなり大きくなる可能性は否めない。事実、インターネット上で「2,000 時間の自主学習で TOEIC 500 点から 900 点まで上げました」などの体験談を目にすることがあるが、学習者自身が高い集中力と動機を維持しながら学習を継続することが出来れば、英語学習の効率性を高めることは十分可能であり、たとえ「CEFR C1 (英検 1 級) に到達するには、大学卒業後約 5,000 時間の自主学習が必要になる」という推定が正しかったとしても、やり方次第で現行の英語教育よりもはるかに効果的・効率的な学習は可能である。この隔たりは、偏に現行の英語教育が CEFR で想定されている学習時間と比較して 3.7 倍ほど長く時間がかかってしまうことに起因するところが大きく、個人が高い集中力と動機を維持しながら、継続的に英語学習を行っている場合には、本稿での推定値と大きく異なるものになる可能性が高いと考えられる。今後は、社会人を含む広範囲な英語学習者を対象とした、学習時間と英語力の関係に関する調査が必要になるのかもしれない。

また、本稿では主に「学習時間」という量的観点から英語学習時間について推定してきたが、「質的」な観点から考えることも同様に重要である。現在、教科の内容を英語で教えようとする CBI (Content-based Instruction) や CBI と外国語授業を組み合わせた CLIL (Content and Language Integrated Learning) などの新しい教授法が多く注目を集めているが、これらの新しい試みは「英語で学ぶ」という新しい体験を学習者に提供することを可能にすることから、大変効果的であると期待されている (Allen-Tamai, 2015; アレン玉井, 2010)。また、多くの教育機関が英語学習を促進するための環境整備を積極的に進めており、英語サロン

の設置、留学生・日本人学生双方を対象とした英語による学位取得プログラムの開発、日本人学生を対象とした海外留学支援などの様々な施策を精力的に展開している。これらの学習環境整備は、日本人学生の直接的な異文化体験を促進するだけでなく、多様な学習ニーズに対応し、学生の学習動機ならびに授業外学習を促進する可能性を秘めており、従来の英語授業を質的側面から改善していく上で大きな影響力を与えることになると考えられる。今回の分析ではこれらの質的側面における変化は意図的に考慮していないが、これらの試みが英語教育・学習の効率化に与える影響は非常に大きく、今後も注目していく必要があるであろう。

(注)

1. 具体的には、後述する表 4、表 5 も参照してもらいたい。
2. 公開データでは大学卒業時の TOEIC-IP スコアは 500 点前後となっている (国際ビジネスコミュニケーション協会, 2016) が、受験者が大学 1 年生の 10 分の 1 (大学 1 年生は約 22 万人なのに対し、大学 4 年生は約 2 万人程度) となっていることから、比較には注意を要する。大学 1 年生に関しては、教養教育の一環として TOEIC-IP を強制的に受験させているケースが多く、英語が苦手な学生もデータに含まれていると考えられるが、大学 4 年生の場合は、大学の語学センターや大学生協が就職活動支援の一環として行う場合が多く、「TOEIC 本試験に向けた準備の一環」として自由に受験している場合が多いと思われる。したがって、公表されている大学 4 年生の IP データにはかなりの偏りがあるものと考えられ、実際には 500 点前後という平均点をかなり下回るものと推測される。
3. FSI では ILR Level 2 (CEFR B2) を目指すコースも開講されているが、88 週間のコースを単に半分にしただけのものであり、その期間設定に何かしらの十分な理由づけがあるわけでもないようである。そこで、本稿では CEFR B2 に達するまでの標準受講時間を FSI に合わせることで、より信頼性のある学習時間数を算出することにした。
4. 学習時間を想定する際に、日本語と英語の社会的認知度における違いがもたらす影響についても考慮する必要がある。アメリカ人にとって日本語は全くの異言語であり、ひらがなやカタカナ、それに漢字を使って文字表記を行う言語であると

ということさえも知らない場合も多いが、日本人にとって英語は最も良く知られている外国語であり、殆どの日本人が少なくともアルファベットや簡単な単語に関する知識は有している(寺沢, 2015)。このことから、日本人にとって英語は非常に困難な言語というわけではないと考える(酒井, 2006, p. 42)のは当然であろう。

しかしながら、英語がビジネスや政治を含む広い分野で世界共通語として用いられている状況を鑑みれば、求められるレベルは決して低いものではなく、様々な状況で十分に対応できるだけの運用力を有していることが往々にして求められ、他の外国語よりもより高度な運用力が期待される。このことから、依然として英語を日本人にとって難しい部類の言語として位置づける研究もあり(井上, 2000)、本稿もこれに倣い検討を行った。

5. FSI方式でCEFR B2、C1レベルに到達するまでの学習時間については、表5を参照してもらいたい。
6. 現在、このカーネギー・ユニットを基にした単位制は見直しが始められており、「ルーブリック評価」などに代表されるコンピテンシーに基づく教育(Competency-Based Education, CBE)(青木, 2017)の導入が積極的に進められている。一方、国際的な単位認定に関しては、依然としてカーネギー・ユニットを基にした方式が広く用いられていることを付記しておく。

## 参考文献

Allen-Tamai, 光江. (2015). 内容を重視した外国語教授法-CBIとCLIL. *ARCLE REVIEW*, 10, 53-63.

British Council. (2016). 「ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)」と「高等教育機関で学ぶための英語力検定試験(Academic English Proficiency Tests)」. Retrieved from [http://mmlanguage.com/english/wp-content/uploads/2016/04/jiao\\_cai\\_nona\\_n\\_yi\\_du\\_tocefrying\\_yu\\_li\\_jian\\_ding\\_shi\\_yan\\_\\_0.pdf](http://mmlanguage.com/english/wp-content/uploads/2016/04/jiao_cai_nona_n_yi_du_tocefrying_yu_li_jian_ding_shi_yan__0.pdf)

Brydges, R., Carnahan, H., Rose, D., & Dubrowski, A. (2010). Comparing self-guided learning and educator-guided learning formats for simulation-based clinical training. *Journal of*

*Advanced Nursing*, 66(8), 1832-1844. <https://doi.org/10.1111/j.1365-2648.2010.05338.x>

Cambridge University Press. (2013).

*Introductory Guide to the CEFR for English Language Teachers*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

Doumen, S., Broeckmans, J., & Masui, C. (2014). The role of self-study time in freshmen's achievement.

*Educational Psychology*, 34(3), 385-402.

<https://doi.org/10.1080/01443410.2013.785063>

Foreign Service Institute. (n.d.).

*Foreign Service Institute Course Catalog 2015-2016*. Washington, DC: Foreign Service Institute.

Jackson, T., Zhong, J., Phillips, C., & Koroluk, L. (2018). Self-directed digital learning: When do dental students study? *Journal of Dental Education*, 82(4), 373-378.

<https://doi.org/10.21815/JDE.018.040>

Jamero, D. J., Borghol, A., & Mihm, L. (2009). Comparison of computer-mediated learning and lecture-mediated learning for teaching pain management to pharmacy students.

*American Journal of Pharmaceutical Education*, 73(1).

<https://doi.org/10.5688/aj730105>

Pedersen, T. H., Kasper, N., Roman, H., Egloff, M., Marx, D., Abegglen, S., & Greif, R. (2018). Self-learning basic life support: A randomised controlled trial on learning conditions.

*Resuscitation*, 126(1), 147-153.

<https://doi.org/10.1016/j.resuscitation.2018.02.031>

Saegusa, Y. (1985). Prediction of English proficiency progress. *Musashino English and American Literature*, 18, 165-185.

Schroeter, C., & Higgins, L. M. (2015).

The impact of guided vs. self-directed instruction on students' information literacy skills. *Journal for Advancement of Marketing Education*, 23(1), 1-10. Retrieved from

- <https://pdfs.semanticscholar.org/a952/7d44168bd4be9049e75d425b5d3e01882a21.pdf>
- Serrat, M. A., Dom, A. M., Buchanan, J. T., Williams, A. R., Efaw, M. L., & Richardson, L. L. (2014). Independent learning modules enhance student performance and understanding of anatomy. *Anatomical Sciences Education*, 7(5), 406-416. <https://doi.org/10.1002/ase.1438>
- Soper, T. (2017). Knowledge into learning: comparing lecture, e-learning and self-study take-home packet instructional methodologies with nurses. *Nursing Open*, 4(2), 76-83. <https://doi.org/10.1002/nop2.73>
- Tannenbaum, R. J., & Wylie, E. C. (2008). *Linking English-Language Test Scores Onto the Common European Framework of Reference: An Application of Standard-Setting Methodology*. ETS. Princeton, NJ: Test of English as a Foreign Language. <https://doi.org/10.1002/j.2333-8504.2008.tb02120.x>
- Trew, G. (2007). *A Teacher's Guide to TOEIC Listening and Reading Test Preparing Your Students for Success*. Oxford University Press.
- Ulrich, R. E., & Pray, S. L. (1965). Comparison of directed self-study vs lecture in teaching general psychology. *Psychological Reports*, 16, 278.
- 愛知教育大学外国語教育講座. (2014). *英語学習自律の向上と学習文化の構築を目指して-愛知教育大学の在り方-*. 愛知教育大学.
- 青木久美子. (2017). 「新しい」大学教育—コンピテンシーに基づく教育 (CBE) の導入. *日本労働研究雑誌*, (687), 37-45.
- アレン玉井光江. (2010). *小学校英語の教育法—理論と実践*. 東京: 大修館書店.
- 井上史雄. (2000). *日本語の値段*. 東京: 大修館.
- 英語4技能資格・検定試験懇談会. (2018). 資格・検定試験CEFRとの対照表. Retrieved September 22, 2018, from [http://4skills.jp/qualification/comparison\\_cefr.html](http://4skills.jp/qualification/comparison_cefr.html)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会. (2016). *TOEIC Data & Analysis 2016*. 東京: 国際ビジネスコミュニケーション協会.
- 三枝幸夫. (2000). TOEICに関する誤解 (1). Retrieved December 2, 2018, from <http://www.nullarbor.co.jp/guidance/index.html>
- 酒井邦嘉. (2006). マルチリンガル英会話入門. *Newsweek 日本語版*, 36-43.
- 寺沢拓敬. (2015). 「日本人と英語」の社会学. 東京: 研究社.
- 根岸雅史. (2016). 「中高生の英語学習に関する実態調査2014」から見えてくるもの (1) —英語の指導と学習は授業の英語使用率とどう関係するか—. *ARCLE Review*, (10), 6-17.
- 畑野快, & 溝上慎一. (2013). 大学生の主体的な授業態度と学習時間に基づく学生タイプの検討. *日本教育工学会論文誌*, 37(1), 13-21.
- 古畑儀行. (2013, June 18). 英語検定英語力の指標としての英検: 英検準2級以上の取得を目指して. 大学・社会の求める英語力/グローバル人材のインフラ “学力担保”としての検定試験活用策/英語編~大学入試・プレイスメント・留学段階/大卒・院入試・就職段階において~. 東京: 地域科学研究会・高等教育情報センター.
- ベネッセ教育研究開発センター. (2008). *調査データクリップ 子供と教育 英語教育 第1回*. 調査データクリップ!子供と教育. Retrieved from <https://berd.benesse.jp/berd/data/dataclip/clip0014/clip0014a.pdf>
- ベネッセ教育総合研究所. (2015). 資料編 基礎集計表【アンケート調査 (学年別)】. In 第2回放課後の生活時間調査報告書 (pp. 19-42). 東京: ベネッセ教育総合研究所.
- マクゴニガルケリー. (2013). *スタンフォードの自分を変える教室*. (神崎朗子, Trans.). 東京: 大和書房.
- 溝上慎一. (2009). 「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討 - 正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す. *京都大学高等教育研究*, 15, 107-118.
- 文部科学省. (2008). *子どもの学校外での学習活動に関する実態調査報告*. 東京: 文



部科学省.

文部科学省. (2018). 平成29年度 英語力調査  
結果 (高校3年生) の概要. Retrieved  
from  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kokusai/  
gaikokugo/\\_icsFiles/afieldfile/2018/  
04/06/1403470\\_03\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2018/04/06/1403470_03_1.pdf)